

云、又藥舖ニテ、此實ヲ和ノ雷丸ト云ハ誤ナリ、雷丸ハ、竹根ノ旁土中ニ生ズル者ニシテ、竹荅トモ云、寓木類ニ詳ナリ、略中

附録、榔桐、詳ナラズ

増附録、榔桐ハ、コノコノキノナルベシ、山中ニ自生アリ、高サ一丈許、ソノ幹直上シテ樹皮綠色ナル

コト、梧桐ノ如シ、注ニ狀似青桐ト云是ナリ、葉互生ス、大サ三四寸、ウリノ木ノ葉ニ似テ厚ク、五尖

ニシテ微シク皺アリ、夏月葉間ニ細蒂ヲ垂ル、コト一二寸、青白花ヲ開ク、花後キア樹莢ノ如キ小

扁莢ヲ綴ル、内ニ小子アリ、秋月落葉ノ後、ソノ莢猶枝間ニ垂ル、

〔近江國輿地志九十九〕油桐、あぶらみといふ是なり、當國處々これあれども、殊に海津の出す處

甚多し、油をまぼるに、其功荏の油におとらず、志賀郡松本村の山に、多油桐を種て油をとる、是を

荏桐とも、罌子桐とも云者なり、たまを刻するものは非なるべし、其形狀桐に似て、其實大毒なり、

本草に、鼠の咬たる處に此油をぬればよしといへり、亦此油にからし油三分一合せ、口なし入、灯

油にして光よくながくとぼるものなりといへり、亦雨衣にぬりて無類なり、今桐油がつかはとい

へば、荏の油にてつくれども、元此油にて製する者ゆへ、桐油の名あり、亦是を漆に加へ、黒物を塗

船をぬる、西土の人船にちやんをかくと云は此物なるべし、西國にてあぶらせんと呼所によ

り油木とも云、亦虎子桐ともいへり、貝原氏、波羅得と云木を近江にうゑて、民用をたすく、白木と

も云ものなりと、日本本草にまざるされたれど、近江に専らうゑて、民用を助くるものは油桐なり、

平住氏が唐土訓蒙圖彙に曰、波羅得を白木といふ、江州にうゑるとする説は非なり、今江州にあ

るものは、即罌子桐なり、波羅木を本草に考ふるに、白木にあらずと云、

〔重修本草綱目啓蒙二十四〕烏臼木、トウハゼ、ナンキンハゼ、一名了白大倉、榕品字、鑿、柏

大倉州、志俗字、美廬、蓬、窻、柏油樹、萬病、木子、長、沙、府、志、綱、猴、桃、ト、同、名、

烏臼